

# Interview

## 駐日ラテンアメリカ大使 インタビュー

第40回 ハイチ共和国

エルフ・モノド・オノラ駐日ハイチ大使

### 国際社会からの支援に感謝

— 日本の復興精神を励みにしたい —



ハイチ共和国のオノラ駐日大使は、ラテンアメリカ協会のインタビューに応じ、大使としての抱負、ハイチの近況と魅力、国際社会への期待、日本との関係などについて見解を表明した。同大使は、1983年生れ（38歳）、駐日大使館一等書記官、大統領府上級経済顧問、駐日大使館参事官、臨時代理大使等を歴任した後、2020年10月から駐日特命全権大使。インタビューの一問一答は次のとおり。

—大使は、2020年10月に駐日ハイチ大使に就任されましたが、それ以前にも長年日本に住んでおられたと聞きました。日本人や日本での生活についてどのような印象をお持ちですか。

私は、2020年10月7日、新任の駐日大使として天皇陛下に信任状を捧呈しましたが、それ以前から日本とはご縁がありました。学生時代の2008年に初めて来日し、神戸大学で経済学の博士号を取得しました。幼い頃から、私は異なる文化を求めて世界中を旅する夢を持っていました。それは、私の両親が多様で異なる文化や人々が人生と生活をより面白く、意味あるものにしてくれると常に教えてくれたからです。

そのような考えを持ちながら、日本を留学先に選んだのは、第一に、日本は大学の学問水準が高い上に豊かな文化があること、第二に、私にとって未知の世界と冒険的な出会いができることでした。アジア、特に日本は、私が馴染んできたアフリカや西欧の文化と大きく異なり、私の好奇心をかき立てるものでした。私にとって来日は、まさに神様が与えてくれた幸運でした。

これまでに日本の発展について多くのことを学びました。日本は第二次世界大戦や地震などで激しい破壊や被害に見舞われましたが、人々は絶望するこ

となく、今日世界有数の大国である日本の再建に責任感を持って取り組んできました。日本について感動するのは、物質的な豊かさや優れた技術はもとより、日本人の精神、誇り、そしてビジョンです。もし日本人に共通する模範的な資質は何かと問われれば、それは日本人の復興力（resilience）だと言えるでしょう。

—ハイチは、ラテンアメリカ・カリブ地域で最初に独立した国であり、「ララ」や「コンパ」のような独特の音楽、「ハイシアン（ヘイシャン）・アート」として知られる絵画などが有名です。また、テニスで活躍する大坂なおみ選手の父親はハイチ出身です。貴国の人々が自国の文化、歴史、伝統等について誇らしく感じていることは何ですか。

ハイチの芸術と文化は私たちの最も貴重な宝物であり、世界中で高く評価されていることを嬉しく思います。ハイチの偉大な芸術家の多くは、世界に足跡を残しました。ジャン・ミシェル・バスキア、レボイ・エキシル、フィロメ・オビン、セネケ・オビンは、最も有名な画家たちです。「アゾール」のラシン・マポウ、クーペ・クルー、タブー・コンボなど、世界中で大成功を取っている音楽バンドが数多くあります。彼らはアフリカ、ヨーロッパ、カリブ地域

にハイチの音楽を送り出し普及させた偉大な伝道者です。

私たちの芸術はカラフルであり、人々の信念と伝統の表現です。「ララ」は、各地のお祭りで演奏されるストリートバンドによる楽しくソウルフルな音楽です。もう一方の「コンパ」は、タンゴ、サルサ、ボレロ、キゾンバのような社交ダンスの一種でパートナーと踊ります。ハイチの音楽（とダンス）シーンは進化し続けており、この2つのスタイルから派生した多くのジャンルがあります（例えば、「ララ」のファミリーで若い世代で人気のある音楽スタイル「ラボデイ」）。また、私たちの祖先の信仰（ブドゥー教）に関連する音楽「ラシーン」（ラシーンは「起源」を意味）もあります。

私たちは大坂なおみ選手が大好きです。彼女に感謝しています。彼女が日本のルーツと同じくらいハイチのルーツを大切にしていることをとても嬉しく思います。彼女はハイチと日本との友情の象徴であり、彼女がその影響力と二つの国への愛情をもって両国間の絆の強化に貢献してくれることを願っています。

私たちが誇りに思うことは、ハイチの芸術家たちが厳しい現実を超克しながら、活気に満ちたカラフルな芸術作品を創作していることです。彼らの作品は、彼らの愛と情熱、愛国心と信念、世界の多くの事柄に対する彼らの考えを表現しています。文学、絵画、音楽、ダンス、料理など、あらゆる形態のハイチの芸術は鑑賞する人々の魂を揺さぶります。それはハイチの芸術家が彼らの作品に魂を注ぐからです。それこそが私たちが私たちの芸術と文化を誇りに思う所以であり、彼らの作品が世界中で評価される理由です。

**－ハイチでは、大地震やハリケーン等の自然災害に加え、2021年7月ジョヴェネル・モイーズ大統領が私邸にて武装グループに襲撃・殺害されるなど、政治情勢が不安定化し、治安情勢も悪化しているようですが、現状を教えてください。**

現在、ハイチ政府は2022年に自由で公正な選挙を実施すべく、すべての政党と政治対話を促進するための環境作りに最善を尽くしています。ハイチの安定、平和、発展にとって代表制民主主義が不可欠な条件だと考えています。

政府は、国民の生活状況を改善し、ハイチの政治的、



写真1：ハイチ独立直後、ハイチ北部のラ・フェリエール山の頂に築かれた巨大な要塞「シタデル・ラフェリエール (Citadelle Laferrière)」、ユネスコ世界遺産。

人道的危機の悪化を防ぐために様々な措置を講じています。政府、野党、市民社会、民間セクターおよび宗教関係者が、ハイチ国民の願望を満たす永続的な解決策を見出すために、真剣かつ包括的な対話を行うことが重要です。また、平和の維持、不処罰との闘い、人権擁護の取り組みや、自由で公正で透明な選挙の準備に向けて国際社会の支援を必要としています。モイーズ大統領暗殺の調査に関し、国際社会がハイチの司法制度と協力してくれると信じています。

地震や自然災害に関しては、ハイチは日本が持つ戦禍や災害から復興する力に学ぶべきだと思います。2010年、神戸大学の博士課程に在籍していた時、20万人以上の死者を出したハイチ大地震が起きましたが、このとき戦後急速な経済成長を遂げた日本の復興力から学ぶべきだと改めて思いました。

近年、ハイチ政府は建物の耐震性を向上させるための様々な施策を実施していますが、その一環として、日本の耐震設計や耐震建築資材について学んでいます。日本には魅力的な技術がありますが、日本人の精神はもっと素晴らしいと思います。日本人は誇りと未来へのビジョン、さらには復興に向けての不屈の精神を持っています。ハイチの人々が同様な精神を持ち、国家発展に貢献することを願っています。

**－ハイチの国民生活の窮状に鑑み、国際機関や日本をはじめ多くの国々から様々な支援が行われていますが、それらをどう評価していますか。今後どのような支援が必要だとお考えですか。**

国際的な支援は極めて重要です。保健、教育、イ



写真2：ハイチ北部のカリブ海リゾート「ラバディ・ビーチ (Labadee beach)」

ンフラ、人道的な緊急事態に対処し、人々の生活を改善する上で不可欠です。これらの支援は、国の優先事項を考慮するとともに、統治機関の能力を向上させることにより、十分に活用される、効果的なものでなければなりません。国の安定と経済成長を促進し、貧困を削減する支援が必要ですが、現地のニーズと優先順位に基づいたものであることが求められています。

例えば、ハイチはいくつかの地殻プレートの境界部分に位置し、地震が起きやすい状況にあります。高い耐震技術を持つ日本から、地震に強い家屋の建設などの支援が期待されます。日本の支援は、ハイチにとって地球温暖化や自然災害などの問題解決に大変役立ちます。経済協力、民間セクター育成（特に中小企業）、環境保護、防災などの分野で、日本は重要なパートナーであり続けてほしいと思います。

### ー日本とハイチとの二国間関係についてどう見られますか。

まず、日本が新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 対策において、「日本モデル」と言われるほど、G7 諸国の中で最も成功していることをお祝いしたいと思います。またこの機会に、日本の政府と国民に対し、ハイチに対する寛大な支援に深く感謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染症との戦いにおいても、日本は医療機器の取得のための資金供与を行い、これにより多くの命が救われました。ハイチのコロナによる死者数は、この地域の他の国々と比較して少ない状況で推移しています。ハイチは若い人口が多く、基礎疾患を持つ人が少ないためですが、今後とも警戒が必要です。

日本の協力の柱の一つは教育分野です。2010年の震災以降の学校再建のための資金支援は非常に重要であり、高く評価されています。また、国際協力機構 (JICA) と文部科学省による高等教育のための奨学金が今後とも増えていくよう期待しています。奨学金は、日本のソフトパワーの促進、次世代リーダーへの投資、学術への均等なアクセスなどにおいて効果的なツールです。私自身、このようなプログラムが、両国間の相互理解と友好関係をいかに促進できるかを示す生きた証人です。2020年4月、JICAはハイチの有力大学との間で、日本の大学院で日本の近代化や開発協力の経験について研究する機会を提供する、「JICA 日本研究プログラム」を立ち上げました。

ハイチは食糧安全保障や経済の安定の分野でも日本の支援を受けています。ハイチの農業は人口の50%以上が関与している最も重要な分野ですが、生産・流通システムや自然災害により食糧自給率は45%に低下。輸入農産物に大きく依存しているため、国際市況の変動は最も脆弱な人々の生活に深刻な影響を及ぼしています。今後は、農業技術の移転、地域漁業の振興、情報技術教育、行政管理能力の向上なども重点分野として協力を期待したいと思います。

### ー二国間関係の強化に向けて、大使が特に力を入れて取り組んでいきたいと考えておられることは何ですか。

外交官としての経験を通じ、ハイチと日本の関係について広く理解を深めてきましたが、今後の二国間協力においては、教育、災害リスク管理、農業が戦略的に重要な分野だと考え、力を入れて取り組んでいきたいと考えています。これまでに多くのアジア諸国を訪れた経験から、アジア地域、特に日本はハイチにとって重要な機会を提供すると信じています。そのためには、ハイチの発展に関する戦略的かつ効果的な計画を作成し、具体的に協力に繋げていくことが大切だと考えています。日本とのパートナーシップについては、災害リスク管理など既に言及し

た分野に加え、漁業分野の研究や技術研修も有益だと考えます。

### — 『ラテンアメリカ時報』の読者に対してメッセージがあれば、お願いします。

ハイチは、1804年1月1日、ラテンアメリカ・カリブ地域で最初に植民地から独立した国であり、奴隷の反乱により独立を勝ち取った世界初の黒人主導国家です。ハイチはドミニカ共和国と同じ島に位置する美しいカリブ海の国で、人々はフランス語とクレオール語を話します。ハイチの人々は寛大で、外国人に非常に暖かいです。大坂なおみ選手は、これからもハイチと日本の架け橋として関係の促進に貢献してくれることでしょう。

駐日ハイチ大使として、ハイチは外国からの投資、特に日本からの投資を歓迎することをお伝えしたい

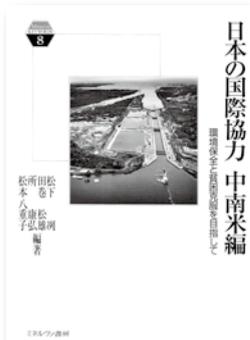
と思います。グローバル化や持続可能な発展の中で、ハイチのビジネス・チャンスについて日本の企業家の皆様と話し合いたいと思います。

日本はハイチにとってインスピレーションの源です。日本のように、困難を乗り越えて発展しようとの決意が高まります。ハイチが、政治的安定につながる新しいリーダーと新しい発想の下で、独自の素晴らしい歴史と日本から学んだ教訓を組み合わせながら、より良い未来に向かって進んでいけることを願っています。

(注) 本インタビューの英語全文は、ラテンアメリカ協会ホームページ英語サイトに掲載しています。

(ラテンアメリカ協会副会長 佐藤 悟)

## ラテンアメリカ参考図書案内



### 『日本の国際協力 中南米編 —環境保全と貧困克服を目指して』

松下 冽・田巻 松雄／所 康弘／松本 八重子編著 ミネルヴァ書房  
2021年11月 272頁 4,500円+税 ISBN978-4-623-09193-5

ラテンアメリカ・カリブ海諸国へのわが国の ODA の展開と現状、事例を踏まえ、この地域の課題を認識して SDGs の促進、日系人の存在と自然環境・生物多様性、新型コロナウイルス感染パンデミックをも考慮し日本の ODA の役割について、学生や NPO 等関係者が考えるための基礎的判断材料を提供する趣旨で編纂されたと謳っており、このシリーズとして『日本の国際協力 アジア編 —経済成長から「持続可能な社会」の実現へ』と『日本の国際協力 中東・アフリカ編 —貧困と紛争にどう向き合うか』も同社から発行されていて、わが国 ODA を広く各地域ごとに俯瞰しようとした意欲的な試みである。

本書は「序章 SDGs 時代の日本の ODA」から始まり、「メキシコ・中米 (7 か国)」、「カリブ海地域 (4 か国 + CARICOM)」、「アンデス諸国 (5 か国)」、「コーノ・スール諸国 (5 か国)」に加え、幅広い視点からの 7 つのコラムから構成されている。各編は編者の解説と比較的若手の主に地域研究者その他の計 18 名が執筆しているが、中南米で ODA を供与することの視点や効果分析、問題提起のアプローチなど、「開発協力」を分析する際の専門性などがまちまちであるとの読後感は否めない。記述は資金協力プロジェクトが中心になっており、中南米でそれなりに効果を上げた医療、教育等の技術協力、草の根協力や無償文化協力の評価にはあまり言及されておらず、またそれらの実現のために直接携わってきた国際協力機構 (JICA) や外務省等の実施体制側、現場で関わってきた技術協力専門家・協力隊員、コンサルタント、建設施工者等側からみた視点が欠落しているのが惜まれる。

とはいえ、それでも日本の国際協力を広く網羅し各地域、各国ごとに整理して紹介しようとした本シリーズは、それなりに有用かつ意義ある出版と評価してよいだろう。

(桜井 敏浩)